

私の保育



阿部 房子

はじめに

私が幼稚園の教師をしていたのは、四年間でしたが、その間に、純真な子どもたちに接し、感動的なすばらしい思いを数々経験しました。しかし今回は、ごく毎日行われてきた保育から、私なりに得た教訓のようなものを綴ってみたいと思います。

まず、私が幼児教育を志して大学に在学していたころ、教育実習の日が近づくと、かわいい子どもたちに、「あー、今日はおもしろかった」と思うようにして降園させるには、何をして遊ばせたらいいかしらと頭を悩ましたものでした。あのころの私は、子どもが活動するにはまず先生が遊びを教えなければいけないものと思っていたからです。学校を卒業して本当の先生になったならば、なお一層、子どもたちが、いつも新鮮な気持ちで遊びに取り組めるよう、新しい遊びを用意するのは、むずかしいだろうと心配したものでした。ところが、どうでしょう。実際に教師として、子どもたちをあずかってみると、教師が意図的に遊びを提案する前に、ほとんどの子どもが、思い思いの遊びを始めるではありませんか。

しかも紙一枚、あき箱一つなど、一見おもちゃになどなりそうにもないような物まで、子どもの手にかかると、立派なおもちゃに変身してしまいます、こうした子どもの自発的な遊びは最も子ども自身を満足させ、時によると、降園の時間が近づいてもなかなか止められないくらい楽しそうに行われました。これで、私が教育実習をしていたころに考えていた不安は消え、かえって子どもの生き生きと遊ぶ姿を見ているうちに、次のようなことに気がつきました。

つまり、教師の方から子どもの遊びを決めたり、与えたりして、いかにも遊ばせるというふうにするのではなく、子どもは興味を持つと、それに没頭して遊ぶのだから、教師は子どもの興味に合わせ、子どもの自発活動を主として指導していくことが大切であるということでした。こうして私の保育の態度が、子どもの活動の中から少しずつ教えられ、新米先生なりに毎日の保育を行うようになりました。

子どもに教えられたこと

先にも述べたように、大部分の子どもは、登園するとすぐ遊びを展開していくのですが、時には「何をして遊ぼうかな」と迷っている子が見られます。教師がいくら前も

って遊具を使いやすいように並べておいても、何となく子どものその時の気分にはそわないのでしょうか。このような時「これで遊びましょう」とか、「あそこにいるお友だちに、混ぜてもらいましょう」などと指図するよりも、ちょっとの間、そっとして上げるのもいいようでした。

Aちゃんは、何をして遊んだらよいかわからないと、よくピアノの下とか、部屋のすみじつと身動きもせず隠れていることが好きで、そこで心を整理すると自分で考えた遊びに向かって元気に活動するのでした。そこで、保育室の一部に、そっと一人でいられるようなコーナーを作っておいて、誰でもちょっと心を落ち着かせることができるようにしました。子どもは、普段賑やかな状態が好きなのですが、時として一人になりたがる時もあるのです。そのような時の扱い方も工夫してみました。

ところで、教師と子どものふれ合いは、毎日一緒に生活しているうちに、目に見えないような細かい糸から、しだいに太い糸のような物で結ばれていくように思います。お互いに信頼する度合が強くなっていきますと、それが子どもの自発的な活動をより一層豊かにしていくのでしょうか。入園当初は教師もひとりひとりの子どもの気持ちをくみ取る

のに一生懸命ですし、子どもも教師の注意事項を聞こうとはします。しかしお互いにすぐ身につくものではないようです。たとえば、平屋の園舎なら、室内にいながら、ちょっと外のようなことがうかがうことができるのですが、私の勤めた幼稚園は二階建てですので、二階で遊ぶ子と外で遊ぶ子を同時に見て回れません。そうかと言って子どものまわりには危険が付きまといっているので油断ができません。ところが、子どもと教師の信頼関係がしっかりしてきますと、子どもは「こういうことは、していけないんだ」とか、「こうしたら皆に喜ばれる」というところがわかってくるのでしょうか。予測もしないような危険なまねはめったにしなくなり、たとえば、砂遊びをした後などは言われなくても遊具をきちんと片付け、手をきれいに洗ってくるようになるのです。こんな時、子どもたちと一緒に生活できることに喜びが湧いてきて、幸せな気持ちにひたるのでした。

私が勤めて四年目に、無口でなかなか友だちと打解けて遊べないBちゃんという子を受け持ちました。この子どもは、机にすわって一人でできる遊びしかやろうとしません。時おり、賑やかに遊んでいるグループに教師も一緒に

なって混ぜて上げますと、一応友だちと遊ぶのですが、教師がそっとぬけるとBちゃんもいつの間にか一人になってしまいます。このような状態で何日か経過しているうち、私が子どもたちの前で童話などを話して上げる時、Bちゃんは、大抵私のひざ元にすわり、じっと話を聞き入りながら無意識のように私のストッキングをなでているのです。また、普段も何となく私のそばにいるのが好きなような状態が見え始め、そのうちBちゃんは、私にことばをかけてくるようになりました。こうしてみますと、幼い子の気持ちのほぐれ方、なじみ方というのは、ことばで「あ、あ、あ、あ、あ、あ」と言われることよりも、自ら得た感覚的快さから、芽生えてくるのではないかと思います。ですから人間は、小さいうちほど、快い感覚を味わうことによつて、他人と接触してみようという気持ちを起こすことがあるようです。この気持ちを起こすことこそ、子どもの精神発達が無理なくていくような気がしました。子どもの感覚は鋭敏ですから、教師は子どもに快い感覚を味わう機会を持たせ、大切に育てて上げるよう配慮すべきだと思います。

『ウルトラテレビ』

私の勤めた幼稚園では、子どもの家庭でのようすと幼稚園でのようすを伝え合うために、『お便り』というカードを利用していました。私は、その『お便り』も保育に役立てようと思い、「先生の家には、この組のお友だちの教と同じ数のチャンネルがある『ウルトラテレビ』があるのよ」という話をしました。これは、お家の方が書いて下さった『お便り』で知ったことを、子どもの前では、「先生の家にある『ウルトラテレビ』で見たのよ」ということにしました。

「Dちゃんはお家に帰っていい子でいるかしら」と思ったら、『ウルトラテレビ』の三チャンネルを回すのよ。そうするとCちゃんが夜寝る前に、ちゃんと歯をみがいているところが映ったり、この間は、四チャンネルを回したらDちゃんが映ってきて、Dちゃんは幼稚園から帰ったらすぐうがいをして手を洗ったのよ。偉いわね。それから幼稚園で作ったあき箱の汽車で遊んでいたら弟さんがほしがるので、弟さんにも同じ汽車を作って上げたの。ずいぶん、いいお兄ちゃんね」とどと皆の前で話してやります。

すると、Dちゃんはもちろんのこと皆、興味深く私の話を聞くのです。今まで話の聞き方が不得意だった子まで、不思議な『ウルトラテレビ』のお話というとしつと聞き入るようになってきました。また、どの子どもも、自分のことを皆の前で話してもらおうとうれしいらしく、自分から教師に向かって話しかけることの少なかった子まで、

「先生、私、きのうママのお手伝いしたんだけど、『ウルトラテレビ』で見てくれた？」

などと話すようになったのです。こうして不思議な『ウルトラテレビ』のお話は、子どもにとって大切な生活習慣を身につけさせるため、それを実行させる手段として、時用いてみました。また、この方法は、お家の方からも喜ばれ、『お便り』に以前よりも詳しく子どものようすを書いてよこしてくださるようになりました。そして、その『お便り』によって、幼稚園での子どものようすに変化などがあつた時は、その意味を探るのに大変参考になりました。この『ウルトラテレビのお話』は、私が退職しても続いており、今だに「先生、遠くに住んでいても、私のこと、テレビで見てね」などという便りが来ます。お家の方もよく子どものようすを書いて寄こして下さるので、幼

幼稚園時代のことが、はっきりと目に浮かんでくるのです。子どもはどんどん成長し、いつかは『ウルトラテレビ』の正体はトリックであるということを知る時がくるでしょう。しかし自然にわかるまで、子どもの空想を羽ばたかせておいてやりたいと思います。

〃私の保育〃をかえりみて

私の保育は、空間的な観点から言うと、どうしても、自分の勤め先である幼稚園のみを保育の場と限定しがちであることを反省し、園外保育を通して、自然に接する機会を作りました。また、勤め先で得た実感的教訓のみに満足してしまうことの偏狭さを恐れ、講習会に参加したり、書物を読んだりして保育の充実化、向上化に努めるようにしたこともありました。ところが自分にいざ子どもができてみますと、子どもを幼稚園であずかるには単に、その幼稚園の時期の子どものようすを知るだけでなく、生まれた時からの子身の発達状態を知ること、保育の上で重要なことだということが知らされます。なお、一人一人の子が、親兄弟、その他、まわりの方々によって、手塩にかけてここまで育てられてきたということ、自分の子どもを持つこ

とによって、なお一層強く感じ、幼稚園の先生は若い、「お姉さん先生」ばかりでなく、自分の子を育てた経験のある「ママさん先生」の存在も非常に大切ではないかと思いました。

私には、一歳になる子どもがいますが、その子のようすを見てみますと、私が家事をやっている相手になってやらないと、つまらなくなってしまう。大人にとって困るようなことをしています。このようなようすを見ていると、子どもを持つに至った今の私には、幼稚園児が、いたずらをした時など、注意をする前に「どうしてそのようなことをしたのかしら」と、考えて上げる、心のゆとりができてくるような気がし、もし、再び幼稚園に勤めるようなことがあったら、独身の時とは、また、異なった保育のあり方が発見できるのではないかと思っている今日このごろです。以上、幼稚園教師をしていたころに得た、私の教訓的なものと、自分自身の子どもを持ってから知り得た保育の教訓のようなものについて、とりとめもないことを綴ってみました。